

## 公共住宅の行方を探る： 岐阜北方集合住宅の試み

建築計画委員会

建築計画委員会では例年春季に、先進的な事例の視察及び当該設計者やそれに関わりをもつ研究者等をパネラーとするシンポジウムを実施している。2001 年度は、岐阜県営住宅ハイタウン北方を事例としてとりあげ、6 月 29 日（金）30 日（土）の両日で行った。

本事例は、磯崎新氏のプロデュース、設計は全て内外の女性と地元の協力事務所にのみ委ねられるという特色をもつ。また磯崎氏の言によると、「つくり続けられた兎小屋」の呪縛から離れ「無味乾燥な団地を解体」し、戦後一貫してわが国の公営住宅で採用され続け、多大なる影響を与えた「nLDK の型」を崩すために、女性たちの手によって「男性原理」の貫通を拒絶することを企図したプロジェクトであった。

なお、本会は建築計画委員会と東海支部設計計画委員会の主催、東海支部岐阜支所法人会の後援により実施され、参加者数はシンポジウム 117 名・見学会 66 名であった。

シンポジウム（6 月 29 日）

初見学（東京理科大学）の司会・進行のもと、上記の問題提起と具体化された解を巡って、設計者及び居住実態調査を行った研究者からの報告ののち、見識豊富な設計者・社会学者からのコメントを皮切りに、三者による熱い論戦が展開された。以下その概要を記す。

（1）講演 高橋晶子（ワークステーション）

公営住宅の建替えである本事例について、県からのマスタープラン策定の依頼に対して磯崎氏が女性建築家による体制案を提案したこと、磯崎氏から各設計者に対してこれまでの硬直化した住戸計画を変えるべく住戸の内側から発想してほしいとの要請があったこと、外国人設計者には映画「東京物語」「家族ゲーム」の鑑賞の勧めがあったこと、及びそれらを受け各設計者が個別に設計した結果を持ち寄って全体をとりまとめる手順をとったことなどの経緯が紹介された。

続いて、各棟の設計的特徴と初期案と現状の違いが解説されたのち、高橋棟に関して、バルコニーの形態、北側の表情の持たせ方、独立した部屋を積極的につくりだす住戸空間、多様な居住形態が可能な土間の提案など、それぞれに込められた設計者としての思いが披露された。最後に、居住者は住棟選択のための説明会において各棟の特徴を積極的に理解しようとしていたこと、及び入居後ディテールについて多少の要望があったことが紹介された。

（2）報告

岐阜県の提供によりハイタウン北方の概要を紹介する映像を上映ののち、2 名の報告者から、2000 年度大会梗概集に報告した居住者調査結果をもとに、高橋棟と妹島棟について居住実態の紹介が行われた。

村尾充宏（東京理科大学）は、本研究会用に詳細な図と解説を作成し住戸の住み方について典型例の報告を行った。両

棟共に設計者のねらいである選択性と可変性が住み方に反映されていること、妹島棟において食事室が家族間の距離を取る上でのバッファーとなっていることなどをコメントした。また、先進的な試みに対し保守的な居住者には必ずしも受け入れられていないと付け加えた。

続いて、今田太郎（岐阜工業高等専門学校）は、特に階段・廊下やテラスなどの空間利用に的を絞って報告を行った。両棟共に、住み手が主体的に住戸と外部との関係を選択できる設計であることを評価し、また居住者の住戸に至る経路に多様性が生まれていることを報告した。しかし、設計者の意図とは異なりモノが置かれている状況など計画上の課題も指摘した。

（3）コメント

コメントは 3 名により行われた。富永謙（富永謙・フォルムシステム設計研究所）は、まずは心のこもったディテールという点で新展開を見せているという評価を示した。そして、高橋棟の土間は住み方の提案や伝統の継承の点で評価できるものの物置きになる可能性もあること、妹島棟は立面が美しく住棟の薄さは住戸の明るさをも生み出しているが、専有面積 70 m<sup>2</sup>に対する構造形式・内部空間スケールの設定として課題があること、及び機能的・知覚的・実存的という空間の 3 側面の中で機能と知覚に重点が置かれている設計であるとの見解を示した。

小嶋一浩（東京理科大学 / C + A）は、住戸空間を黒（空間と機能 / 呼び名が一意対応）と白（行為により呼び名が変化）に分けて考えるという視点を提示し、nLDL 型が黒ばかりであったのに対し、デラー棟は白黒変換が鮮やか、高橋棟は水回り以外が全て白、妹島棟はデジタルに白黒が変換との分析結果を示した。

上野千鶴子（東京大学）は、社会学の立場から、また保田窪団地（独自調査を過去に実施）との比較も踏まえ、論を展開した。具体的には、保田窪団地と行政手法が類似、4 棟選択の自由は居住者に与えられているが住み手の視点は欠如、家族機能は既に社会化し住戸内だけでは限界がある中で設計者の意図は居住者に十分通じていない、「女性による設計」は一種のキャッチコピーなどの見解を示した。

（4）ディスカッション

いくつかの切り口から活発な議論がなされたが、ここではその骨子を紹介する。論点の第一は「住み手の選択性」であり、設計者はどこまでフレームをつくるべきか、空間の生活を創ることへの役割などが論じられた。第二は「生活の外部化への対応」であり、高橋棟住戸がどのような生活形態をも受け入れることのできる設計であること、公営住宅は今や建替えが中心であり都市機能は自ずと入ってくることなどが語られた。第三は「気候風土への対応」であり、高橋棟では岐阜県の寒さや伊吹おろしを考慮し 2 期工事 A タイプ住戸中央部を内部空間化したこと、住民参加により把握すべき事項であるとの指摘などの意見が出された。最後に、会場からの質問がいくつか出され、住戸の設計要件としては専有面積とその戸数以外は設計者の判断に委ねられたこと、高齢化の問題に関しては当初から十分配慮すべきとの指示があったが、基本設計作業中の住民説明会参加者の状況から高齢者が極めて多く核家族は少ないことを実感し住戸設計にとりかかったことなどが補足された。

全体としては、本事例の提案性を機軸とした活発な意見交

換がなされ、集合住宅の新たな取組みに対する関心と今後の期待の高さをあらためてうかがい知ることができる意義ある企画であったと評価できる。

なお、シンポジウム参加者も北方集合住宅の背景である岐阜県の地域性を十分理解すべきとの判断から、東海支部岐阜支所法人会の支援のもと、鶺鴒見物が希望者により取り行われた。

建築視察（6月30日）

ハイタウン北方、及び岐阜大垣周辺の建築視察を行った。ハイタウン北方は、石川保博氏（岐阜県建設管理局）山田郁朗氏（同 都市整備局）の案内により、団地全体と各棟共用部分、及び妹島棟とホーリィ棟の住戸内部の見学を行った。岐阜大垣周辺の建築に関しては、車戸慎夫氏（車戸設計事務所）の案内により、ソフトピアジャパンの諸建築、矢橋家住宅、桑原邸（国重要文化財）及び養老天命反転地の見学を行った。

高井宏之 / 三重大学